

図書ニュース

第6号

2007. 2. 16

大阪府立北野高校 図書部

春は旅立ちの季節です。通い慣れた学舎を去り、新たな世界を目指す三年生、在校生の皆さんも上級学年での新たな出会いや経験に胸をふくらませていることと思います。今回の図書ニュースでは、普段より少しはゆとりのあるであろう『春休みに皆さんに読んでほしい本』ということで五名の先生方に推薦図書を挙げていただきました。

国語科

森達也・森巢博「ご臨終メディア」(集英社新書／二〇〇五年刊) 361/M21/1

「ご臨終メディア」とは衝撃的な書名である。この書名の意味は、現代日本の新聞・テレビ・雑誌などのすべてのマス・メディアがメディアとしての役割を放棄している、その結果として、日本のすべてのマスメディアは死に体になっているということである。どこの国でもメディアは同じようなものじゃないかと考える人もいるかもしれない。しかしそうではない、と著者の一人オーストリア在住の森巢博は具体的な例を挙げて述べている。

メディアは立法・司法・行政に対して第四の権力といわれる。それは、メディアが巨大な影響力を持つということだけではない。メディアが、立法・司法・行政という三権に対して、それらから独立してチェックする機能をもつゆえに第四権力と呼ばれるのである。ところが、日本のメディアにはこの独立性が完全に失われている。メディアとしての役割を果たしていない。それはなぜか、を問うたのがこの本である。

中立公平な報道というのはあり得ない。それよりもメディアに求められるのは公共性である。報道することが社会的に意義があるかどうかを報道機関が判断して、もし報道内容に対して抗議や批判があれば、きちっと対応すればよい。どこからも抗議がこないように報道する前から自粛してしまう。そこにあるのはメディアの死である。

ある瞬間に、国中が一色に染まり、その中で異論が許されない。みんなが自主的に右にならえをする。それがこの国の恐ろしさだといった人がある。メディアがそれに荷担するとなるとどれほど恐ろしい状況が生まれるか、想像するだけでも怖い。メディアが果たすべき、果たすことのできる役割は非常に大きいのである。

もう一人の著者森達也はテレビディレクターと映画監督の両方の仕事をしている。また、「放送禁止歌」「いのちのたべかた」など多くの本も書いている。「いのちのたべかた」は牛馬を食用に処理する施設で働く人々を撮るというテレビドキュメンタリーの企画が実現せず書物の形で出したものである。「放送禁止歌」は、別に法律で禁止されたわけでもないのに放送界でタブーとされてきた歌について筆者が撮ったテレビドキュメンタリーをもとに、別に書物として出版したものである。

「ご臨終メディア」は、メディアに深く関わり、その内情を知り、しかもなおメディアの可能性を信じたい人間による最良のメディア入門である。新書版で対談の形をとっているので大変読みやすい。ぜひ多くの人に読んでほしい本である。

社会科

イモヅル式読書のすゝめ ～この春は何を読む？～

正門横のササバザクラの樹木が芽吹いている。この季節になれば、ひとの心の芽も膨らんでくる。喜びにあふれている芽もあれば、哀しみに傷ついているものもある。どちらにしてもこれからの自分を生み出してくれる大切な芽だ。樹木の芽を育てるには、窒素、リン酸、カリを含んだ肥料を適度にあてがうことが必要である。では、心の芽を育てるには？これは難しい。でも、やっぱり肥料がなくてはなあ。心の芽をじわ〜んとさせたり、ハラハラドキドキさせるような肥料って何だろう？一言で、となれば、やはり＜カンドウ＞か？一人旅、映画、ミュージカル、スポーツ・・・これを導いてくれるものはいろいろあるが、ちと金も体力も要りそうである。となれば、本か・・・、そうや読書やないか！これは安くて、どこでもできそうである。

肥料はジワジワ効いてくるほうがよろしい。＜肥料がジワジワ効いてくる＞読書のイメージとは＜イモヅル式読書＞あるいは＜弥次喜多風読書＞である。目の効用を考えて本を選ぶこともよくあるけれど、そこにはジワジワ効いてくるという感触はないのだ。＜ふとしたこと＞がきっかけで、気がついたら＜なぜかいま＞こんな本まで手を伸ばすようになっている、といった偶然性に身をまかせ、好奇心にまかせて次に行く読書のスタイルがいい。自然体ということか。まず、はじめは何でもいいから噂の本を手にとってみることだ。ということで、今からあなたに噂を流してみよう。

まず、若者たちにとっての人気作家の中からだれか一人を選んでみたらどうだろう。ここ（北野）の図書館でいうと、日本の作家ならば、井坂幸太郎、川上弘美、村上春樹、小川洋子、重松清、恩田陸、石田衣良、宮部みゆき、東野圭吾、森絵都、村上龍、江國香織、浅田次郎、綿谷りさ、市川拓司などがよく読まれている。もちろん小説というジャンルに限らず、おもしろそうなタイトルの本があったら、その本からスタートしたらいい。ちなみに、私の場合、高校時代はドストエフスキーを中心としたロシア文学にハマってしまった。この発端は、1年生のHRでたまたま隣の席にいたS君がトルストイの『戦争と平和』を読んでいることにびっくり仰天！これに下手な対抗心を燃やしたことにある。『罪と罰』はともかく、『未成年』など読みながら涙ホロロだったのは、もはやこの歳になると体験できないことである。ある作家の主な作品を、手当たり次第読んでみるこのおもしろさに気がついたのはこの時期だったかもしれない。

今だってそうなんやから。こっそり言うと、最近では佐藤賢一の作品を読みつづけている。高校生に紹介してもいいけれど、男女のからみの描写がちょっとキツイ作品もあるかな、ということでナゼカ遠慮している。この御仁はまだ若い。1968年生まれで、おもしろいのは彼

の生まれ故郷である山形県の鶴岡市（あの藤沢周平も同郷）に根をおろして小説を書いていること、中世、近世のフランスを舞台とした作品が多いことなど、いろいろある。ファンクラブでも作ろうかな。君、入りませんか。最新作に『アメリカ第二次南北戦争』などがある。本校図書館にある彼の本は、（残念ながら）『ダルタニャンの生涯』と『英仏百年戦争』の2冊である。この春も、私はせっせと賢一の本を読むことにしよう。さて、オヌシはどうする？

体育科

春休みに向けて3冊の本を推薦します。

(1) 「武士道」解題 副題 ノーブレス・オブリージュとは 李登輝著 小学館文庫 630円

今ブームの武士道の本の中でも、忘れられた日本精神の本質を、戦前日本の教育を受けた台湾の哲人政治家が説いている異色の本。

テクストは、新渡戸稲造の『武士道』。欧米では、宗教教育なくして道徳なしといわれるが、日本では武士道が指導者たちの道徳規範であったといわれています。日本精神の神髄を、筆者が、古今東西の哲学知識を総動員して解題しています。

(2) 「たった一度の人生だから」 星野富弘・日野原重明対談 フォレストブックス1260円

心がひどく傷んだらこの一冊を薦めます。

私が尊敬する二人の珠玉の対談です。特に、日野原先生が人生をマラソンではなくサッカーに例えていたのはおもしろかった。又、星野富弘さんの言葉「たった一度しかない自分の人生だから、社会がどうあろうと、人が何を言おうと、そんなことにひるむことなく、大切な自分の人生を、志を持って進んでいけたらいい」には、ほっとさせられます。

(3) 「失われた書を求めて」 石川九楊著 岩波書店 1155円

ハウツーではなく、ホワイのために「いま」を考える本です。書字の宇宙と希望の原理、人類はまだ3歳児、世界はまさにこれからだ！単に書の本ではありません、この閉塞した時代に希望の明かりをともしてくれる本です。筆者は『唯言論』を提唱し、国家・宗教を越えた世界を目指しています。そのためには、日本の憲法九条を、世界に広げていくことが大切、と主張しています。

国語科

「サンカ」の本 （【 】内は本館所蔵の図書記号）

まずは、五木寛之『風の王国』（近日入庫）を読んでみよう。日本の山野を風のように移動する超人的といってもいい能力をもった人々、（以前図書館報にも書いたが）あれは「サンカ」一族であった。流浪する民の血を引き継いで現代社会に生きる「サンカ」たちの闘いがロマンあふれる筆致で描かれている。

そんな人々がはたしてこの日本にいたのだろうか？—— いたのである。柳田國男『「イタカ」及び「サンカ」』（定本柳田國男全集第四巻）【918-Y7-1-4】には、「一家族を擧げて終始漂泊の生活を為すものは今日別に一種族あり。多くの地方にては之をサンカと稱す。」「さも用事ありげに急ぎ足にて我々とすれちがふことあり。是れ大抵はサンカ也。」などとある。さらに、「三十三年間に及ん

だ」研究の成果として一九六五年に出版された三角寛『サンカの社會』【361-M9-1】では、「サンカ」社会の生活・分布・社会構造などが写真も含めて極めて詳細に書かれている。「コトツ（言い伝え）」によると、「既に天照大神の御治世のとき」からの歴史があり、「ヤマト民族の母體である、國津神の直系である」そうだ。統制された全国的な組織があり、「シノガラ（隠密族）」という秘密結社が運用している金額は「二億八千萬圓」に達しているという。おお、これぞまさしく『風の王国』に登場する「へんろう会」ではないか。

ところが——この『サンカの社會』という本、その内容の信憑性に疑いが持たれた本でもある。確かに、「サンカ文字」発見のくだりなどは小説じみていて、これが「研究」かと苦笑してしまう。

（三角寛は戦前に「サンカ小説」を書きまくって流行作家になった人である。）まあそれでも、今や消えてしまった「サンカ」の人々を撮った写真だけでも値打ちがあるとは思っていた。だが——筒井功『サンカの真実 三角寛の虚構』【384-T6-1】を読まれよ。その写真ですら捏造であったという。

『風の王国』や『サンカの社會』が生み出すおどろおどろしくもロマンティックな「サンカ」のイメージは実態とはかなり異なるようだ。それでは実態はどうなのか？——結局、わからない。ただ、かつて「サンカ」生活を経験した人々の聞き取りをして書かれた筒井功『サンカ社会の深層をさぐる』【384-T6-2】や、沖浦和光『幻の漂泊民・サンカ』（図書館報で紹介済）を読むと、偏見と差別の中で漂泊に生きた人々であったことは確かなようだ。

国語科

「春の日の花と輝く」

高校の音楽の授業で習ったこの歌は、「麗しき姿の いつしかにあせてうつろう 世の冬は来るとも」と続く。要は愛の永遠を歌った歌なのだが、愛の歌なのに「古い」を歌う意外性がチクリと胸を刺してなぜか忘れられない。

それはともかく、青春真っ只中の高校生には「春」と来れば「恋」かもしれないので、春にふさわしい愛の小説（？）を紹介しようと思う。

瀬尾まいこの「幸福な食卓」。最近、映画にもなったこの小説は、少し風変わりな家族の日常を描く。初々しい高校生のカップル、主人公と「勉強」少年の温かく痛ましい関係が切ない。同じく、映画になって話題を呼んだ小川洋子「博士の愛した数式」。毎日更新され、ゼロから始まってはより深くなっていく人間同士の愛の交流が印象的だ。人間に対する作者の優しいまなざしが胸に沁みる思いがする。最後に、森絵都の「風に舞い上がるビニールシート」。夫婦の深い愛と別れを描くこの作品。国際問題に興味を持つ人にも読んでみてほしい。

オマケにもう一つ—春と言えば受験のシーズンでもある。そろそろ受験勉強を、と言う二年生諸君には、石原千秋「教養としての大学受験国語」を勧めたい。単なる受験参考書ではなく、入試問題を解きつつ、受験によく出る現代思想に触れることができる内容で、目からウロコの快感が得られるのではないだろうか。

新着本紹介コーナー

【081-122203-Y1-1-16】 よりみちパン！セ九 ハッピーになれる算数

新井 紀子 著 理論社

「数学」と聞いただけでつい視線が宙に泳ぐ…でしょ？数学が苦手なら、思いきっていちばん簡単な算数まで、もどってみればいいのです。そもそもの仕組みをのんびり思い出しつつ、「期末試験八十点！」と「ハッピーな人生」の両方を、手にしてくださいね。

【081-122204-Y1-1-17】 よりみちパン！セ 二十二 コドモであり続けるためのスキル

貴戸 理恵 著 理論社

無理しておとなになる必要なんて、ぜんぜんなかった。「今」は「将来」のための手段なんかじゃないし、「一人前」になっちゃったおとなの人だって、ホントはいつだって、降りていける。いっしょにコドモやりませんか？

【383-122229-M7-1】 地球の食卓 世界二十四か国の家族のごはん

ピーター・メンチェル フェイス・ダルージオ 著 TOTO 出版

あの国の人たちは、どんなものを食べているのだろうか？ 二十四か国を巡って集めた、三十家族の一週間分の食材六百食を大公開。

【502-122178-C1-1】 飛び道具の人類史 火を投げるサルが宇宙を飛ぶまで

アルフレッド W. クロスビー 著 紀伊國屋書店

いったいなぜ、人類はこんなにも繁栄したのか？本書はその理由として、直立二足歩行や火を操る能力とならんで、「ものを投げる能力」を挙げる。飛び道具を使って、遠く離れた場所に変化を生じさせることへの飽くなき探究心こそが歴史を形づくってきたのだ。人類進化の足跡から、戦争のスタイルと軍事技術の変遷、惑星探査や宇宙開発まで、壮大なスケールで描く画期的な人類史。